

くまびょう

105号

NEWS

くまびょう
NEWS2006年
3月1日

[発行所]

国立病院機構熊本医療センター
(前 国立熊本病院)

〒860-0008

熊本市二の丸1番5号

TEL (096) 353-6501代

FAX (096) 325-2519

平成17年度第2回(通算第20回) 開放型病院連絡会開催される



福田稔委員長のご挨拶

平成17年度第2回、通算第20回開放型病院連絡会は平成18年2月13日(月)19時より当院の地域医療研修センターにて開催されました。

まず院長が開放型病院となって10年になること、歴代の開放型病院連絡協議会

委員並びに登録医の先生方へのお礼を述べ、病院の現状について報告しました。次いで、開放型病院運営協議会委員長の熊本市医師会長福田稔先生より挨拶を頂きました。福田先生は理想的な医療提供には高度先進医療の取り組み、患者満足度の充実、医療資源の活用が必要であるがそれを実現するためには、医療の機能分化と医療連携が不可欠であることを述べられました。

全体会議に移り、熊本市医師会理事の田中英一先生と池井が司会を担当し、まず症例呈示として形成外科の大島医長が「ケロイド、肥厚性瘢痕の治療」を、呼吸器内科の森松医長が「国立病院機構熊本医療センターにおける呼吸器科の現状と展望」についての講演を行いました。続いて総合討論では清川研修部長が新研修医の研修の実情報告と来年度の地域医療への協力をお願いしました。来年度は11名の2年次研修医が地域医療研修に出かけますが、お引き受け頂きました先生方には宜しくご指導の程お願い申し上げます。また森経営企画室長が「開放型病院の共同指導の利用方法」の案内を行いました。多数の先生方にご紹介頂いた入院患者様の診察に来院して頂いていますが、その際はぜひとも「共同指導料」を算定して頂きますようお願い

申し上げます。

フロアからの自由討論では登録医の宮本先生より当院に対する要望等を述べて頂きました。最後にメインテーマの特別講演として厚生労働省医政局指導課 医療計画推進指導官の針田哲先生より「医療提供体制(救急医療を含む)について」のご講演を頂きました。先生は今後高齢化に伴い増加する医療需要に対処するには機能分化と医療連携が重要であることを強調され、現在行われている医療連携の実例を挙げながら講演されました。講演終了後フロアの登録医の先生方との活発な討議が行われました。

今回も多数の登録医の先生方にご出席頂き、最後まで熱心にご参加下さいまして有り難う御座いました。今回で開放型病院連絡会は20回を数えましたが、来年度からの連絡会に対するご意見、ご要望等ございましたら是非ともご教授下さいますようお願い致します。

(副院長 池井 聡)



連絡会風景

ホームページをご利用下さい。診療、研修、研究など情報満載です。

国立病院機構熊本医療センター ホームページアドレス <http://www.hosp.go.jp/~knh/>



「一せぼね医」

中村整形外科

院長 中村 孝文



くまびょうニュースに寄稿させて頂きありがとうございます。

今冬の異常寒波は診療報酬改正でますます締め付けられる医療事情を反映しているかのごとくですが、国立病院機構熊本医療センターの先生方にはいろいろとお世話になっておりこの紙面を借りて御礼申し上げます。

当院は平成16年11月1日に開院致しまして早くも1年が経過致しました。私事で恐縮ですが20年間大

学病院で脊椎一筋にやってまいりました結果、重症患者の診療は数多く手掛けられたものの common disease である多数の腰痛患者さんのニーズに応えることができませんでした。

このジレンマを解消すべく脊椎専門の医院という看板を掲げ（いわゆる“一せぼね医”）一人でも多くの患者さんの診療を行うべく活動させて頂いております。当院ではMRI・CT、全身用骨密度測定装置を備え、可能な限り受診された患者さんを即時診断し治療計画を立てられるよう努めております。さらに手術用顕微鏡を備え、ほとんどの脊椎疾患の治療に対応できる施設を整えることができたと自負致しております。

おかげさまで1年間の脊椎手術件数は244例で全手術件数の89%を占め、19床の診療所としてはこの位が限界かと感じております。また開院しましても大学で経験しなかったような稀な症例に遭遇することもあり、今後も clinical research は続けて行きたいと考えております。しかし個人の施設では診療に限界があることはいまでもなく、私の専門外の整形外科疾患を始め、内科的疾患を合併しているケースや神経内科疾患などでは国立病院の先生方に今後とも大変お世話になるかと存じますので宜しく御協力御援助をお願い申し上げます。

最後に国立病院機構熊本医療センターの益々の発展を祈念致しております。

平成17年度 院内感染対策研修会開催報告

去る1月25日（水）より27日（金）の3日間にわたり、国立病院機構九州ブロック主催による平成17年度の院内感染対策研修会が、当院地域医療研修センターにて開催されました。国立病院機構九州ブロックから医師10人、看護師25人、九州ブロック以外の国立病院から医師5人、看護師14人が参加しました。さらに、開放型病院登録医の施設からも10人の参加がありました。本研修の目的は、“院内感染対策に関する最新の専門的知識を習得し、院内感染対策の充実を図ること”とされています。

本研修では院内感染で著名な外部講師12名にお願いし、当院からも萱島（疥癬）、青木（流行性角結膜炎）、河野（院内感染サーベイランス）、芳賀（エビデンスに基づく院内感染対策）、辻（医療廃棄物の管理）、東島（国立病院機構ネットワークによる薬剤耐性菌サーベイランス）が講演しました。

今回はトピックスとして、鳥インフルエンザ、多剤

耐性菌の現状と問題点、院内感染起因菌の分子疫学など興味ある演題が採用されました。院内感染の減少は患者様に最も望ましいことであり、また近く開始されますDPC（包括払い）導入の観点からも、特に重要と思われます。なお、御協力を頂きました多くの方々に御礼申し上げます。（副院長 河野 文夫）



研修会風景

最近のトピックス

気管食道瘻発声(TEシャント発声)



感覚器センター

耳鼻咽喉科医長

緒方 憲久

喉頭癌の進行症例や放射線治療後の再発症例では最終治療として喉頭全摘術（喉摘）が行われます。確実な治療手段である一方で、喉摘は発声機能を喪失させるため治療後の社会復帰を妨げます。そのため多くの代用発声法がこれまで考案されています。大きく3つに分けられ、1) 笛式（タピアの笛）や電気式の人工喉頭を用いる方法、2) 食道発声法、および3) 気管食道瘻発声（以下TEシャント発声）法であります。それぞれの方法で長所、短所がありますが、ボイスプロテーゼを用いたTEシャント発声法は1980年にSingerらに報告されて以来、手術手技の簡便さと音声獲得が容易であることなどから欧米を中心に頻用されています。本邦でも徐々に使用頻度は高まっており、熊本県下でも2000年よりこの発声法を採用しており良好な結果が得られています。今回はその発声法について解説するとともに現況について報告します。

喉頭が摘出されると気道と食道が分離されます。すなわち口腔からは食事のみを摂取することになり呼吸は前頸部に作成された永久気管口を介して行われます。声帯が摘出されるために発声機能が消失するというより発声音源である呼気を振動・共鳴腔である咽頭・口腔内に誘導できないことが無発声につながっています。TEシャント発声法とは分離された気道と咽頭・食道との間に瘻孔を作成することで呼気を咽頭内に誘導して発声する方法です。声帯の代わりに咽頭粘膜が新声門を形成し、振動することで発声が可能となります。この方法では呼気を咽頭腔に送るために呼気時に永久気管口を指で閉鎖する必要があります（図1、2）。また、咽頭・食道内の唾液・食物が瘻孔を經由して気管内に流れ込む（誤嚥する）のを予防する目的で一方弁の機能をもつプロテーゼが必要になります。気管食道瘻

孔の作成とプロテーゼの装着は喉摘と同時に行うことが可能であり5～6分を要するのみです。過去に喉摘を行われた方でも新たに瘻孔を作成してプロテーゼを装着することは可能です。

TEシャント発声法を導入する以前に喉摘を受けられた患者70例の会話機能に関するアンケート調査では、食道発声および電気式人工喉頭を使用している人はそれぞれ3割にとどまっておられ家人とのコミュニケーションをとる方法として筆談と答えた人が約4割も占めていました。TEシャント発声の患者においては約8割の方が会話機能を再獲得されており、その有用性が確認されています。食道発声法より習得が簡単であり、声質は電気式に比べると肉声に近いという特徴があります。

プロテーゼを定期的に外来で交換する（約3ヶ月毎）必要があることや高齢者や理解力が低下している方では会話の再獲得が困難であるという点は事前に十分説明しておく必要があります。

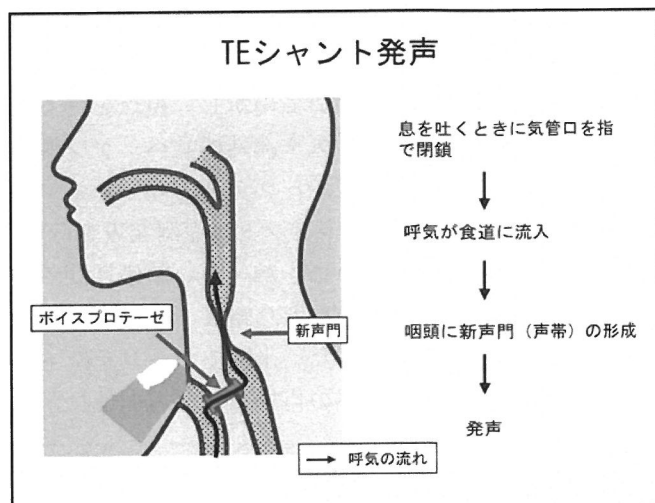


図1 TEシャント発声法の原理

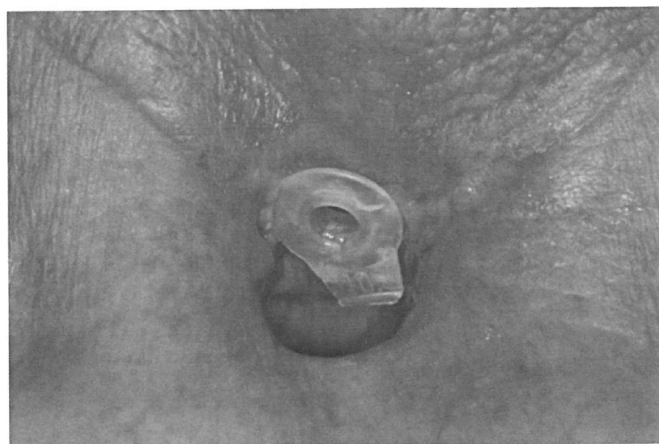


図2 永久気管口とボイスプロテーゼ

新臨床研修制度 3年を迎えるにあたって



研修部長

清川 哲志

必修化された研修制度が3年目を迎えることとなります。2年間の研修を修了した医師達がそれぞれの専門性に向かって旅立とうとしています。彼らが充実した研修を行い医師としての基礎作りがしっかりと出来たのか、私達研修医を受け取った病院側の取り組みが評価されることとなります。

平成17年度の新しい取り組みとして、「グランド・ラウンド」と命名して、大学の各診療科の教授を招待し早朝セミナーを行いました。各専門分野について臨床と研究の面白さについて教授からの熱いメッセージを送って頂きました。10回にわたるセミナーの中で、プライマリーケアから最先端の研究まで視野の広い講演を聴いて将来の専門性を選択するための参考になったことと思います。

12月には、研修体制についての新しい視点を得るために南カルフォルニア大学医学部外科学ヘーゲン準教授を招待してのスモールグループディスカッションを開催しました。研修医、レジデントは症例発表を行い、問題点の討論を英語で行いました。短い準備期間の中で、指導医と研修医は熱心に取り組み、ヘーゲン準教授からの高い評価を得ました。米国でのレジデント研修体制の講演もあり、私達の目指すべき方向性に示唆

を与えてくれました。

平成18年2月には、CVCトレーニングを開催し、中心静脈カテーテル挿入のシミュレーターを用いて指導医のデモンストレーション、ガウンテクニックを用いた実践的な指導を行いました。

シミュレーターを用いた研修は、ACLS等で行われていますが、より専門的な技術をどのように安全確実に習得していくのか、新しい取り組みであると思います。

これらの企画は、研修医と指導医からの評価を受けてさらに改善し、よりよい充実した研修プログラムに作り上げて参ります。

本来の各分野の研修につきましても、指導医の方々が熱心に取り組んでおります。指導側もスーパーローテーションという体制に習熟して来た面があります。短期間にどのように指導し、研修医の能力を高め、患者を受け持つという責任感をどのように引き出すのか日夜努力して頂いています。

18年度は11名の研修2年次が地域医療の分野で研修協力施設での研修を予定しています。皆様方の職場でプライマリーケアの第一線についての研修となります。これまでの広い経験から得られた患者様とのふれ合いの大切さにつきまして宜しくご指導お願い致します。

当院は、卒後教育研修病院として、研修医、レジデント、スタッフそれぞれのレベルで能力を向上し、高度なチーム医療を実践することで質の高い医療を目指しています。研修はこの中の一つの取り組みであり、研修を通じての各分野と協力連携し発展的取り組みを行っていききたいと思います。今後とも宜しくお願い致します。

研修レポート

麻酔科

はや さき あい こ
早 崎 藍 子



4月からお世話になっております。研修がスタートしてから早いもので11ヶ月が経過し、危うく、くまびょうNEWSにてご挨拶できないまま1年が過ぎるところでした。改めまして、早崎藍子と申します。月に数

回は聞かれるのですが、同姓の著名な先生と血縁関係は（私の知る限りでは）ありません。あと1年と1ヶ月、どうぞ宜しくお願いします。

今までに、神経内科、腎臓内科、消化器科、救急外来、麻酔科とローテートし、各科でさまざまなことを学ばせて頂きました。賛否両論ある現在の研修制度ですが、各科それぞれの診断・治療方法やものの見方に接し、視野を広げるという意味では、これから先医師としてやっていく上で貴重な財産となるのではないかと考えています。2年間が無駄だと言われたいよう、その時自分にできる精一杯の事をしていくつもりです。

研修が始まる前は、正直なところ医師としてちゃんとやっていけるのだろうかかと不安でしたが、指導医の
(次ページへ続く)

(続き)

先生方をはじめとする各科の先生方、スタッフの方々に助けられてなんとかここまでやってこれたように思います。

国立病院機構熊本医療センターの良いところの一つは、各診療科間で垣根がなく、どの科の先生方も快く相談に乗ってくださるところではないかと思えます。また、月に数回の救急外来(準夜帯)研修では国立病院機構熊本医療センターならではの多種多様な症例を経験し、本当に多くのことを学ぶことができました。最初のうちは当番の日を憂鬱に思うこともありました

が、今では楽しみに思うほどです。「楽しい」と言っているのは研修医の分際でなんてことをと怒られるかも知れませんが、本当に充実した毎日を送っています。もちろん楽しいことばかりではなく、思うように動けない自分に苛立ったり、自分の至らなさに自己嫌悪に陥ることもしばしばです。ただ、比較的打たれ強く立ち直りが早いところが自分の長所のひとつだと思っていますので、日々の反省を生かしつつこれからも頑張っていく所存です。

どうぞ遠慮なく(時には)厳しいご指導のほど、宜しくお願い致します。



産婦人科

おお やま り え
大山 理恵

こんにちは。平成17年5月より採用になっております。

熊本市出身、平成16年大分医科大学を卒業しました。大分では湯布院や別府にも近いところに住んでおりましたので、温泉三昧の日々を送っておりました。6年ぶりに帰熊した当初は、熊本の街が様変わりしているのに驚き、大分が恋しくもありました。

ご存知のように、現在の2年目の研修医から、卒後臨床研修が必須になりました。専門の科を選ぶ前に、いくつかの必須の科を研修していくというものです。

平成16年5月より熊本大学附属病院群卒後臨床研修医として働き始めました。1年目は熊本大学附属病院で内科、外科、麻酔科、救急・ICUをローテートしてきました。

2年目になり、国立病院機構熊本医療センターに採用になってからは、より多くの患者様、幅広い疾患を経験することができました。同時に初めてのことばかりで戸惑うことも多々ありました。特に当直に関しては、わからないことばかりでA当直、B当直の先生方には大変ご迷惑をお掛けしました。しかしこの当直のおかげで、風邪から始まり、小児、心/脳血管障害、精

神疾患など多くの疾患を経験することができました。

国立病院機構熊本医療センターでは必須の小児科、精神科、産婦人科、選択期間は循環器内科及び救命救急で研修させて頂きました。多くの症例を受け持つことができ、卒後臨床研修の目的でもあるプライマリーケアが少しでも身につけていければと思う次第です。指導に当たって下さった先生方には、毎度毎度一からの研修医がまわってくるにもかかわらず、丁寧に指導して頂きました。また、困っている事や、判断に悩む患者様を受け持っている際には、科の垣根を越えて、親身に相談、指導をしてもらえるので、非常に勉強になりました。

入院患者様のことは、先生方をはじめ、病棟スタッフ、検査科や薬剤科、栄養管理室の皆様にも大変お世話になり、その度に様々なことを教わることができました。一人で患者様を診るのではなく、チームとして患者をバックアップしているのだと、実感する毎日でした。

2年目になり日々の業務をこなすことが精一杯だった1年目と比べると、少しは心に余裕がでてきたかな、と思う日々です。多くの先生方にも出会え、多くの考え方にも出会ってきましたが、最たる恩師は患者様だと実感しております。医師としての姿勢を学べた1年間だったと思います。

今後は専門分野についての勉強を深めていきますが、2年間の研修は非常に有意義なものだったと思います。専門以外に、多くの疾患をいろいろな角度から経験することができたのは、今後の診療の糧になると強く感じております。

■原稿を募集致します■

登録医の先生の投稿を歓迎致します。400～800字程度を基準にお願い致します。

送付先 〒860-0008 熊本市二の丸1-5

国立病院機構熊本医療センター 『くまびょうNEWS』編集室まで

留学生レポート



おう がい
黄 凱

中国
広西医科大学附属病院
心臓血管内科

1980年代以来、高度経済成長期に入っている中国人は豊かになり、生活習慣と食生活は昔と随分変わりました。但し、脂質や糖分やタンパク質等の過剰摂取及び飲酒喫煙、ストレスの解消不能などの一連の原因で、多くの中国人は「亜健康」という健康と病気との中間を示す状態にあります。統計によると90年代以来冠動脈疾患は既に中国国民の健康と生命を最も脅かす病気になり、「第一号の殺し屋」と言われています。

日本は世界中で「長寿の国」という美名を博しています。医療保健システムが完備され、医療技術も進んでいます。とくに冠動脈疾患介入治療の分野では、アジアの先頭を走っています。広西自治区では冠動脈疾患の発病率があきらかに増大し、発病年齢は低齢化になる傾向を呈していますが、冠動脈疾患介入治療技術こそがその重要な治療方法です。だから、今回熊本へ冠動脈疾患介入治療技術の研修に参加させていただいたことは、私の人生において視野を広げ知識を蓄積する非常に貴重な経験だったと思い、大変光栄に存じております。

冠動脈疾患介入治療技術の研修

熊本に来る前から、国立病院機構熊本医療センターの心臓血管内科での心血管疾患介入技術を行う歴史は長く、特に冠動脈疾患介入治療技術は非常に優れていることが分かっていたので、今回の研修の内容は冠動脈疾患介入治療技術にしました。藤本和輝先生のご指導により、私は心カテーテル室で冠動脈造影技術及び冠動脈分枝病変経皮の冠動脈形成術（PCI）、冠動脈慢性閉塞病変のPCI、冠動脈旁路移植術（CABG）後のPCI、急性心筋梗塞の急診PCI、また急性心筋梗塞病例においてthrombersterの応用等を含めた冠動脈疾患介入治療技術を勉強しました。藤本先生は冠動脈疾患介入治療技術に優れておられるだけでなく、周囲血管病の治療においても素晴らしい技術をお持ちです。閉塞性動脈硬化症（ASO）や、血栓閉塞性脈管炎（Buerger病）や、糖尿病により起きたASOなどの病気は、四肢の中、小動脈に損害を及ぼして手足の痛みを引き起こし、更に肢体の壊死に至ることもありますが、

通常の治療法としての薬物治療と外科手術（動脈bypass 或いは腰交感神経切除術、手足の切断手術）では良い効果が望めません。しかし、藤本先生はこれらの病気の治療において血管新生療法を活用し、患者自体の骨髄幹細胞の局部注射を通じ、病変部位の血管再生を促進して著しい効果を得られました。これは私にとって大変良い勉強になりました。それ以外にも、私はASOの経皮動脈形成術（PTA）、埋込型除細動器（ICD）埋込植込術等の介入技術を勉強しました。今回の研修は藤本先生のおかげで私にとって良い勉強になり、予想以上の成果を得たと思っております。先生は博学であるばかりでなく、高い見識を持っておられます。研修期間中はいろいろご指導をいただき誠にありがとうございました。近いうちに先生に中国広西で講義をして頂けますようお願いさせていただきます。

インターナショナル学術年会への参加

2005年9月26日から29日まで、神戸市で行われた2005年CCT（Complex Catheter Therapeutics）年会では、日本、アメリカ、中国、フランス、ドイツ、オランダ、オーストラリア、スペイン、シンガポール、韓国、イスラエル、インド、マレーシア、香港、台湾などの20数ヶ国と地域から介入治療技術の専門家や学者達が一堂に会して、drug-eluting stent（DES）の長期治療効果や、冠状動脈複雑病変のPCI術における血管内超音波（IVUS）の活用と手術後の評価や、冠動脈疾患の遺伝子治療と骨髄幹細胞治療等の介入治療に関するホットな課題を巡って詳しく検討したり意見を交換したりしました。また、アメリカ、中国、ドイツ、マレーシア、韓国などの心臓治療センターで行われた手術の生放送を実施しました。私も最新の学術情報を得て、とてもいい勉強になりました。半年の研修を通じ、冠動脈疾患介入技術に対する認識を深め、多くの新しい知識を身につけました。帰国してからもさらに研鑽に努め、研修で学んだことを臨床でもっと良く活用するよう頑張るつもりです。今回の研修を無事に終了することができ、国立病院機構熊本医療センターの宮崎院長、河野副院長、それに藤本先生、宮尾先生、梶原先生、村上先生、大庭先生及び庶務係長の堀口さんにはいろいろご指導して頂き、本当に有難うございました。

研修は7ヶ月しかありませんでしたが、皆様のおかげで無事に、そして充実した研修生活を送ることができました。専門知識だけでなく日本の文化や歴史、また風俗習慣等に関しても良い勉強になりました。日本の美しい景色も非常に印象的でした。これからは微力ですが、精一杯努力して、中国と日本の友好のためにできる限りのことをするつもりです。

最後になりましたが中日両国の友好関係が今後益々深まることをお祈りします。

■ 研修のご案内 ■

第56回 特別講演 (無料)

[日本医師会生涯教育講座5単位認定]

(※1月18日予定講演の変更分)

日時▶平成18年3月1日(水)19:00~21:00

場所▶国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

「プライマリーケアでの呼吸器診療」 座長 国立病院機構熊本医療センター副院長 河野 文夫
久留米大学第一内科教授 相澤 久道

[問合せ先] 国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局 TEL 096-353-6501 (代表) 内線263 096-353-3515 (直通)

第57回 特別講演 (無料)

[日本医師会生涯教育講座5単位認定]

日時▶平成18年3月8日(水)19:00~21:00

場所▶国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

「災害医療—日本の対応」 座長 熊本赤十字病院院長 東 大弼
国立病院機構災害医療センター院長 邊見 弘

[問合せ先] 国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局 TEL 096-353-6501 (代表) 内線263 096-353-3515 (直通)

第200回 初期治療講座 (会員制)

[日本医師会生涯教育講座5単位認定]

日時▶平成18年3月11日(土)15:00~18:00

場所▶国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

「腹水の診断と治療」

- 座長 熊本市医師会 鶴田 克明
国立病院機構熊本医療センター消化器病センター消化器科医長 杉 和洋
1. 内科の立場から 国立病院機構熊本医療センター外科 栗崎 貴
 2. 外科の立場から 国立病院機構熊本医療センター産婦人科部長 三森 寛幸
 3. 産婦人科の立場から 国立病院機構熊本医療センター産婦人科部長 三森 寛幸
 4. 難治性大量腹水に対する腹腔-静脈シャント治療 大牟田市立総合病院研究研修部長 野口 和典

この講座は有料で、年間10回を1シリーズ(年会費20,000円)として会費制で運営しています。但し、1回だけの参加を希望される場合は会費5,000円で参加いただけます。

[問合せ先] 国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局 TEL 096-353-6501 (代表) 内線263 096-353-3515 (直通)

第75回 救急症例検討会 (無料)

日時▶平成18年3月15日(水)18:30~20:00

場所▶国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

「小児科救急疾患」 国立病院機構熊本医療センター小児科部長 高木 一孝

医師、薬剤師、看護師、放射線技師、臨床検査技師、栄養士、救急救命士、救急隊員、事務部門等全ての医療従事者を対象とした症例検討会です。医師以外の方にも理解できるよう配慮した内容にしています。

[問合せ先] 国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター事務局 TEL 096-353-6501 (代表) 内線263 096-353-3515 (直通)

第54回 三木会 (無料)

(糖尿病、高脂血症、高血圧を語る会)

[日本医師会生涯教育講座3単位認定]

[糖尿病療養指導士認定更新0.5単位認定]

日時▶平成18年3月16日(木)19:00~20:45

場所▶国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

1. 血糖コントロールにおけるスライディングスケールの正しい使い方
2. 糖尿病のクリティカルパスチェックシートについて
3. 持続性重症低血糖をくり返す重症インスリンノーマの1例

なお、興味のある症例・ご疑問・ご質問のある症例がございましたら、ご持参いただきますようお願い致します。
[問合せ先] 国立病院機構熊本医療センター総合医療センター代謝内科 小堀 祥三・東 輝一郎 TEL 096-353-6501 (代表) 内線796

第86回 月曜会 (無料)

(内科症例検討会)

[日本医師会生涯教育講座3単位認定]

日時▶平成18年3月20日(月)19:00~20:30

場所▶国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

1. 呼吸器内科による胸部X線写真供覧 国立病院機構熊本医療センター総合医療センター呼吸器科医長 森松 嘉孝
2. 持ち込み症例の検討
3. 症例提示「他の腎疾患が疑われた糖尿病腎症の2例」 国立病院機構熊本医療センター腎センター腎臓内科医長 富田 正郎
4. ミニレクチャー「最近の経口糖尿病薬療法について」 国立病院機構熊本医療センター総合医療センター内分泌・代謝内科 児玉 章子

日頃、疑問の症例、興味のある症例、X線写真、心電図等がございましたら、ご持参下さいようお願い致します。

[問合せ先] 国立病院機構熊本医療センター副院長 河野 文夫 TEL 096-353-6501 (代表) FAX 096-325-2519

平成18年 研修日程表 3月

国立病院機構熊本医療センター 地域医療研修センター

3月	研修ホール	会議室	その他
1日(水)	19:00~21:00 第56回 特別講演 [日本医師会生涯教育講座5単位認定] (※1月18日予定講演の変更) 座長 国立病院機構熊本医療センター副院長 河野 文夫 「プライマリケアでの呼吸器診療」 久留米大学第一内科教授 相澤 久道	16:00~18:00 皮膚科組織検討会 (図)	17:00 消化器疾患カンファレンス C
2日(木)	18:30~21:00 日本臨床細胞学会熊本県支部研修会		7:50 整形外科症例検討会 C 17~19 循環器カンファレンス C 18~19 代謝内科カンファレンス M
3日(金)			8:00 消化器病研究会 C 8:00 麻酔科症例検討会 手 8:00 皮膚科症例検討会 臨 17~18 救急部カンファレンス C
4日(土)	14:00~16:00 第188回 滅菌消毒法講座《会員制》 「物品管理システムの重要性とその方法」 熊本中央病院健診センター所長 後藤 俱子		
6日(月)			8:00 MGH症例検討会 C 16~18 泌尿器科病棟カンファレンス 別6 17~18 小児科カンファレンス 外来
7日(火)		18:00~19:30 血液病懇話会 (図)	8:00 救急部カンファレンス C 15~18 外科術前術後症例検討会 C 17:00 消化器疾患カンファレンス C
8日(水)	19:00~21:00 第57回 特別講演 [日本医師会生涯教育講座5単位認定] 座長 熊本赤十字病院院長 東 大弼 「災害医療-日本の対応」 国立病院機構災害医療センター院長 邊見 弘	16:00~18:00 皮膚科組織検討会 (図)	
9日(木)	18:30~20:30 熊本県臨床衛生検査技師会臨床化学月例会		7:50 整形外科症例検討会 C 17~19 循環器カンファレンス C 18~19 代謝内科カンファレンス M
10日(金)			8:00 消化器病研究会 C 8:00 麻酔科症例検討会 手 8:00 皮膚科症例検討会 臨 17~18 救急部カンファレンス C
11日(土)	15:00~18:00 第200回 初期治療講座《会員制》 [日本医師会生涯教育講座5単位認定] [日本内科学会認定内科医更新のための2単位認定] 座長 熊本市医師会 鶴田 克明 「腹水の診断と治療」 1. 内科の立場から 国立病院機構熊本医療センター消化器科医長 杉 和洋 2. 外科の立場から 国立病院機構熊本医療センター外科 栗崎 貴 3. 産婦人科の立場から 国立病院機構熊本医療センター産婦人科部長 三森 寛幸 4. 難治性大量腹水に対する腹腔-静脈シャント治療 大牟田市立総合病院研究研修部長 野口 和典		
13日(月)	18:00~19:00 第29回 くすりの勉強会 (公開)		8:00 MGH症例検討会 C 16~18 泌尿器科病棟カンファレンス 別6 17~18 小児科カンファレンス 外来
14日(火)	19:00~20:30 熊本県臨床衛生検査技師会 一般検査研究班月例会	18:00~19:30 血液病懇話会 (図)	8:00 救急部カンファレンス C 15~18 外科術前術後症例検討会 C 19~21 泌・放射線科合同ウログラム C 12~13 糖尿病教室 研食
15日(水)	13:00~17:00 糖尿病教室 18:30~20:00 第75回 救急症例検討会 「小児科救急疾患」	16:00~18:00 皮膚科組織検討会 (図)	17:00 消化器疾患カンファレンス C
16日(木)	19:00~20:30 第55回 三木会 (糖尿病、高脂血症、高血圧を語る会) [日本医師会生涯教育講座3単位認定] [糖尿病療養指導士認定更新0.5単位認定]	19:30~21:00 有病者歯科医療研究会	7:50 整形外科症例検討会 C 17~19 循環器カンファレンス C 18~19 代謝内科カンファレンス M
17日(金)			8:00 消化器病研究会 C 8:00 麻酔科症例検討会 手 8:00 皮膚科症例検討会 臨 17~18 救急部カンファレンス C
20日(月)	19:00~20:45 第86回 月曜会(内科症例検討会) [日本医師会生涯教育講座3単位認定]		8:00 MGH症例検討会 C 16~18 泌尿器科病棟カンファレンス 別6 17~18 小児科カンファレンス 外来
22日(水)		16:00~18:00 皮膚科組織検討会 (図)	17:00 消化器疾患カンファレンス C
23日(木)		19:00~21:00 熊本脳神経疾患懇話会	7:50 整形外科症例検討会 C 17~19 循環器カンファレンス C 18~19 代謝内科カンファレンス M
24日(金)			8:00 消化器病研究会 C 8:00 麻酔科症例検討会 手 8:00 皮膚科症例検討会 臨 17~18 救急部カンファレンス C
27日(月)			8:00 MGH症例検討会 C 16~18 泌尿器科病棟カンファレンス 別6 17~18 小児科カンファレンス 外来
28日(火)	18:30~20:30 血液研究班月例会	18:00~19:30 血液病懇話会 (図) 19:00~21:00 小児科火曜会	8:00 救急部カンファレンス C 15~18 外科術前術後症例検討会 C
29日(水)	19:30~21:00 臨床口腔外科研究会	16:00~18:00 皮膚科組織検討会 (図)	17:00 消化器疾患カンファレンス C
30日(木)			7:50 整形外科症例検討会 C 17~19 循環器カンファレンス C 18~19 代謝内科カンファレンス M
31日(金)			8:00 消化器病研究会 C 8:00 麻酔科症例検討会 手 8:00 皮膚科症例検討会 臨 17~18 救急部カンファレンス C

(図) 図書室 C 病院本館2階カンファレンス 手術室控室 臨 臨床研究部会議室 別6 別6病棟 外来 小児科外来 研食 研修棟食堂 M ミーティングルーム
問い合わせ先 〒860-0008 熊本市二の丸1番5号 国立病院機構熊本医療センター地域医療研修センター
TEL 096-353-6501 (代) 内線263 096-353-3515 (直通)